

読みにおける文字への注意配分の発達的变化

○西菜見子・國田祥子

(中国学園大学大学院子ども学研究科)

小学生の頃、教科書を音読させられた経験がある人は多いだろう。音読にはどのような効果があるのだろうか。國田・中條(2011)は、成人を対象に音読の注意配分機能について検討し、通常の場合では音読と黙読の成績に差がなかったが、タッピングを行わせた二重課題状況では音読の方が黙読よりも成績が優れていたと報告している。この結果について國田・中條(2011)は、音読の注意配分機能は注意資源が制限された状況において有効に働くのではないかと述べている。そうであるなら、成人よりも注意資源が少ない子どもは、音読の注意配分機能が見られやすいのではないだろうか。

そこで本研究は児童を対象に仮名ひろいテストを行い、音読の注意配分機能の発達的变化を明らかにすることを目的とする。

方法

実験参加者 小学校 1-6 年の各 2 クラス、計 406 名(音読群 204 名、黙読群 202 名)であった。

実験計画 学年(1-6 年:参加者間)×材料(無意味綴り、物語文:参加者内)の 2 要因混合計画であった。

実験材料 今村(2000)の無意味綴りの仮名ひろいテストの文字数を増やしたものと、グリム童話から抜粋した文章を用いて作成した物語文を、仮名ひろいテストの課題とした。

手続き 2 クラスの内、一方のクラスを音読群、もう一方のクラスを黙読群とし、國田・中條(2011)を参考に集団実験を実施した。実験は、クラス担任教員に依頼して行ってもらった。

結果

回答に不備があった音読群 2 名を除き、音読群 202 名、黙読群 202 名を有効回答とした。

検出されたターゲットの数を正解数として算出した。音読の正解数は、学年が進むにつれて増加していた($F_{(5,196)} = 24.62, p < .001$)。また交互作用が有意であり($F_{(5,196)} = 3.01, p < .01$)、2 年生では無意味綴りの方が、4, 6 年生では物語文の方が、正解数が多かった。次に、最後に検出されたターゲットに含まれるターゲット数を作業数とし、正

確性(正解数/作業数×100)を算出した。音読の正確性も、学年が進むにつれて向上していた($F_{(5,196)} = 5.94, p < .001$)。また、無意味綴りの方が物語文よりも正確性が高かった($F_{(1,196)} = 36.25, p < .001$)。

黙読においても、正解数、正確性とも学年が進むにつれて増加もしくは向上していた($F_{(5,196)} = 28.57, p < .001, F_{(5,196)} = 5.69, p < .001$)。また正確性は交互作用が有意であり($F_{(5,196)} = 3.52, p < .01$)、5, 6 年生で無意味綴りの方が物語文よりも正確性が高かった。

考察

1 年生には黙読が困難だった可能性が考えられるため、以降は 2 年生以上を対象に考察を行う。

4 もしくは 5 年生以上では、音読群、黙読群とも、正解数は無意味綴りと物語文で変わらないか、物語文の方が多くなっていた。しかし、正確性は無意味綴りの方が高かった。これは、成人を対象とした國田・中條(2011)の結果と同様であった。注意資源の量は発達に伴って増加し、高学年になると成人とそれほど変わらなくなるのではないだろうか。そのため、音読をしなくても文字への注意配分が可能となり、音読と黙読に差が見られなくなったのではないだろうか。

一方、3, 4 年生までは音読群と黙読群で差が見られた。すなわち音読群では無意味綴りの方が物語文よりも正解数が多く、正確性が高かったが、黙読群では差が見られなかった。トップダウン過程に干渉されない無意味綴りは、物語文よりも仮名ひろいテストの正確性が高くなることが知られている。低学年の児童は成人よりも注意資源が少ないため、音読の注意配分機能が働き、無意味綴りの成績が保たれたのではないだろうか。

以上から、音読の注意配分機能は小学校低学年で見られやすいことが示唆された。

引用文献

- 今村陽子 (2000). 高次脳機能障害診断マニュアル 新興医学出版社
 國田祥子・中條和光 (2011). 音読は注意資源の配分に有効か 中国学園大学紀要, **10**, 109-117.